

リトルバスターズ！EX 同人小説
『小毬 Going my way』
(Web 公開版)

TTM 2013

目次

第一章 明方・佐々美受難編…………… 四

第二章 日中・小春日和と渾名呼び編…………… 一三

第一章 明方・佐々美受難編

テーブルに、本日のメインディッシュを置く。

——青椒肉絲。わたくしの十八番料理の一つですわ。

これで、お夕飯の準備は完了。

あとは……あの方のお帰りを、今か今かと待つだけですわ。

ピンポン。

「！」

その矢先に、チャイムの音。

インターホンを覗き込むと、

「俺だ、帰ったぞ」

あの方のお声……！！

機械越しでも、その声音にわたくしの心はとろけてしまいそうですわ……。

……あ、ここでうっとりしている場合ではありませんわ。

早くドアを開けませんと！

「ただいま」

ドアを開けて響いた第一声。わたくしの一番大切なひと。愛する旦那様……。

宮沢……謙吾様……。

「お、お帰りなさいませ、宮沢様……」

さ、最初ちょっと声の上擦ってしまいましたけど……うまく、言えましたかしら？

「……………」

「……………？い、いかがなさいまして？宮沢様……………」

な、なんですか？宮沢様……。わたくし、もしや何かお気に障る事をしてしまったのかしら……？

「俺とお前の間柄は、もうそんなものではないだろう？そんな他所他所しい呼び方を、しないでくれ……………」

「……！」

「そ、そうですね！ わたくしとこのお方は……既に、永遠の愛を誓い合った間柄！
ならば、このお方への呼び方はこれしかありませんわ！」

「……おかえりなさいませ、あなた」

「……！！ わ、わたくし、言いましたわ……！ 今、はっきりと！ 『あなた』 って！！」

「ああ、ただいま、おまえ」

「そう言つて、抱きしめられる。」

「(あ……)」

「わたくしは……夢を、見ているのでしょうか。」

「あの憧れのお方……宮沢様……いえ、謙吾さんと、今、こうして、愛の抱擁を交わしているなんて……。
わたくしが、熱を帯びる。」

「彼と繋がった唇から、熱くなる。」

「もうこのまま、とろけてしまえよう……。」

「(ああ……)」

「これを幸せと呼ばず、なんと呼べばいいのでしょうか……！」

「それで……あなた？ これからどうなさいます？ お風呂かお夕飯か……」

「目一杯愛を交わし、心の欲求を満たしたわたくし達は、今度はお身体の欲求を満たす事に致しました。
お風呂、お夕飯……疲れを癒し、栄養を摂る。このいずれかが欠けても、愛を育む事はできませんわ。」

「それとも……」

「そして、三つ目。」

「身体の欲求と、愛を育む、この二つを併せ持つ、究極の手段。」

「それとも、わ……」

「ちようちよろ！」

「きゃあつ、大胆ですわ……！　で、でも、わたくしは構いませんわ！　いえむしろ大歓迎……って、ちょうちょ？」
謙吾さんの口からなんだか違和感のあるお言葉が。

「おともだち」

謙吾さんが急にわたくしの手を取ってきましたわ。

先程の抱擁ほどではないにせよ、謙吾さんのお手と触れ合うのも大変甘美なものである筈なのですが、今の私の頭の中にはそれに勝る違和感が渦巻いておりました。

「いえあの謙吾さん？　わたくし達はお付き合いしている仲ですのでお友達という訳では……」
「るらら」

「きゃ！？　今度は歌い始めましたわ！？」

「な、なんなんですかの……！？」

そんなわたくしの腕を引いて、謙吾さんは踊り始めましたわ……。

ゝゝゝ

「……ふあ！？」

……。

……。

……。

……？

(二、ここは……)

わたくしが見上げているのは、見慣れた天井。

わたくしと神北さんのお部屋の、天井。

(ゆ、夢でしたの……)

あんな……宮沢様とあんな風になれた夢なんて、今回が初めてでしたわ……。

それが……惜しい……惜しいですわ……何故途中からあんな事に……。

その時。

「みよんみよん……」

……物凄く聞き覚えのある声色で、まったく聞き覚えのないお言葉が聞こえてきましたわ……。

「くぴー」

この声の主は、わたくしのお隣で気持ち良さそーに寝ている、神北さんですわ……。

「べんぎんしゃあぁ……ん……」

今夜も寝言絶好調ですわね……一体どんな夢を見てらっしゃるのかしら……。

どうやら、今夜もこの神北さんの寝言のせいで、へんちくりんな夢を見てしまったようですわ……。

「……ふえ……」

(……)

「……」

(……)

「……」

(……)

「……あつぷるしゅとうるーでるうー」

(ああくもうーうるさいですわね……！)

こうやって神北さんの寝言がひどい日は、こちらの寝付きも悪いものになるんですの……。

近いうちに、耳栓でも買おうかしら……などと、本気で考える事もありますわがばっ

「……」

！？神北さんがいきなり起き上がりましたわ！

「……おしっ」

ああ、お手洗いですね……。

「ふにゆう……」

神北さんのお布団からもそもそという物音。お布団から這い出たようですね。

(助かりましたわ……)

…ちゃっっちゃつと用を足しに行っっちゃって下さいなっ。

その間にわたくしは寝かせて頂きますわ。

「ふにえ〜……」

ガチャ……

……バタン

……完全に寝ぼけておりましたけど、これでもちゃんと用を済ませて戻ってこられるのが神北さんの凄いと
ですわ……。

ささ、このチャンスに狸寝入りを決め込みますわよっ

「……」

「……」

「……」

「……すー……」

〜

「さささがわささみ！」

「笹瀬川佐々美ですわっ」

「笹瀬川佐々美！」

「な……！？ あ、あら。ちゃんとのおうと思えば言えるじゃありませんの」

「言えた……っ！」

「……！？」

な、なんでそんなに目を輝かせているんですの……？

「ささせがわささみ……！ ささせがわささみ！」

「ちゃんとと言えるようになったぞ、おまえの名前！」

「そ……そうですわね！ く、くれぐれもこれからは間違えないうでくださいませ」

「うん……じゃあ、これであたしはやっと、お前の友達になれたんだな！」

「！？ お、お友達！？」

「笹瀬川佐々美！」

ぎゅむっ。

「きゃっ……！」

な、なんですの……な、棗鈴が、私に抱きついてきましたわ！？

「すりすり……」

「な……ちよ、くすぐりたいですわ！ あ、もう……お離しなさいっ！」

ゝゝゝ

「……お離しなさいっ！」

ハッ……。

次の瞬間、目の前に広がっていたのは一面の白い壁。
見慣れた光景。わたくしと神北さんのお部屋ですわ。

「……あら」

また夢を見ましたのね……。

「わたくしつたら……」

なんであんな夢を……。

棗鈴に抱きしめられるなんて……その、考えた事ありませんでしたわ……

「……」

「……………」

な、何かしら、この感触……。

さ、先程、あんな夢を見たからでしょうが、なんだか今も誰かに抱きしめられているような感じがいたしますわ……。

さわっ

「ひゃうっ」

お腹のあたりに指の感触……！！

何かが後ろにいる！

(ま、まさか！？)

渾身の勢いで振り返ると、

「くか……」

なんとも幸せそうな神北さんの寝顔。

「や、やっぱり……」

またですのね……。

神北さんがわたくしのベッドに間違えて入ってきていたようですわ……。そりゃ最初はびっくりしましたけど、もう何回もやらかしてくださっているので慣れてしまいましたわ……。

少しずつ届き始める陽光と、小鳥のさえずり。

ちよっと早いですけど、もう起きてしまったほうが良さそうですわね。

「ほら、神北さん、朝ですわよ？ 起きてくださいな……」

うまく体勢を変える事ができないので体を揺すって神北さんに呼びかけますが……中々目を覚ましてくれません。

「……えへへ、リーんちゃらん……」

「わたくしは棗鈴ではありませんわ!」

「ほわあっ!?!」

……いい夢見れました? 神北さん……。

「ご、ごめんねさーちゃん……私またさーちゃんのお布団に入っちゃって……」

「別に、もういいですわよ……」

この子の寝言はひどかったですが、別に寝不足というほど眠れていなかった訳ではありませんし。朝練に支障が出るような体調では無かったのは幸いでしたわ。

ただ……。

「で、でもでも、さーちゃんの髪、また私のよだれでべとべとになっちゃった……」

ただ、髪の毛のコンディションは最悪になってますの……。

こういう事態にも慣れましたわ……。ええ、慣れましたとも……。

「か・み・き・た・さん……?分かっておりますわね?」

「う、うん、髪の毛乾かすのと、セットするの手伝うよー!」

またシャワーを浴びて髪のお手入れをし直す羽目になってしまいましたわ……。

ううっ、今使っているトリートメント、結構なお値段だったので大事に使いたかったんですのに……。

「え、えーと、今何時だろ……あ、これなら朝ごはんの時間にもなんとか間に合いそうだね」

起床時間が早かったおかげで、この時間なら髪をセットする時間を多めに取ったとしても朝食には間に合いそうですわ。

……では、責任取って下さいましね神北さん。

今朝のセットは、とびきりのものにして貰いますわよ!

「私、がんばるよー!」

……わたくしのこの思いを知ってか知らずかやる気になった彼女を背に、わたくしはお風呂場へ向かいました。

んもう、ばさーっと、全部洗い落しますわよっ

第二章 日中・小春日和と渾名呼び編

スーツ……スーツ……

紫色の髪。

梳くほどに輝きが増していくみたい。

この美しい髪を持ち主はさーちゃんです。

笹瀬川佐々美だから、さーちゃん。

今、わたしはさーちゃんの髪を梳いています。

さーちゃん、髪の手すごい長いから、寝る前に髪のお手入れする時は時々手伝っています。

……？今は朝だって？

あ、あう……。

え、えと、今朝はちよつと特別で、私が寝ぼけてさーちゃんに抱き付いて寝ちゃって、さーちゃんの髪に私のよだれがべつとりとくつついてしまっていたのです……。

だから、さーちゃんはまたシャワーを浴び直さなければならなくなってしまったのです。セツトもやり直し……というわけなのです。

う、うええんごめんねさーちゃん……私の寝相が悪かったせいでこんな事になっちゃって……。

なので、今はせつせとさーちゃんの髪の手を梳いているのです。

こういうのも慣れてきたので……あ！べ、別に、私はこんなヘマをしよっちゅうやってしまった訳ではなくていつも夜のお手入れを手伝っているうちに慣れてきたという意味であってさーちゃんのベッドに入り込んで寝ちゃったのは……

……ごめんなさい、前にも何回かやっています……。

「……思ったより早く支度できそうですね。神北さん、わたくしの髪、いかがかしら？」

梳かれている髪を一房つまみながら、さーちゃんが訪ねてきました。

さーちゃんは今日ソフト部の方の朝練があるのです。

でも、この時間ならなんとか間に合いそう。

「ふえ？ うん、いつもみたいに綺麗だよー。枝毛もないし、サラサラだねえ」

「そう……。ん、確かに、もう良さそうですわね」

自分でも髪のコンディションを確認して、満足そうに答えるさーちゃん。

……。さーちゃん、元気になってくれてよかった。

さつきシャワー浴びる前はすっごいげんなりしていただんだけど(うん……。私も髪の毛によだれが付いていたらきつとすっごく気分ブルーになるよ……。)、今は結構「機嫌な感じ」です。さーちゃんは髪を梳いてもらうのが基本的に

大好きなので、きつとその影響がもしれません。

ようし、このままさーちゃんにもつと元気になってもらおう。

さーちゃんの髪のリボンを結ぶ。

このさーちゃんのリボン、すっごく可愛い！このリボンを結んであげるのが私は大好きです。

こう、リボンの形を整えると、ちょうどねこさんの耳みたいになって……

「ねこみみー」

ぴんつ、とさーちゃんのリボンをひっぱる。

「ひゃあっ!？」

さーちゃんがびくつと震える。

「ち、ちよつと神北さん、遊ばないで下さいます!？」

「あ……。ごめんねさーちゃん、はしやぎすぎちゃったよ……」

さーちゃんに元気になってもらいたいのに、自分だけがはしやいじやった……。

「そ、そんなに落ち込まなくてもいいですわよ……」

「うん……。リボン付けたさーちゃん、とつても可愛かったから……」

「! ……い、いつも付けてるリボンじゃありませんの……」

あ、さーちゃん顔真っ赤になっちゃった。

うん、だから、いつも、可愛いんだよー。

朝ドタバタしちゃったけど、さーちゃんは無事、朝練に向かって行きました。そして、私の登校時間。

「おはよう、こまりちゃん」

教室に入ると、先に来ていたりんちゃんから朝のご挨拶。

棗鈴だから、りんちゃん。

「おはよー！りんちゃーん」

最近はりんちゃんの方から挨拶をしてくれます！

「すりすりすりー」

りんちゃんに頬ずりをするまでが、私達の朝のご挨拶。

うん、この肌触り、やっぱりさーちゃんとそっくり。

「んにゅう……」

「はあ……可愛い……」

はにかむりんちゃんを眺めながら、いつの間にか登校していたゆいちゃんがうつとりとした表情を浮かべていました。

来ヶ谷唯湖だから、ゆいちゃん。

「鈴君の引き締まりつつも、絶妙な柔らかさのほっぺも良いが、小毬君のふくよかなほっぺもまた……甘美なのであろうな……」

「……ふえ？ ゆいちゃんも頬ずりしたいの？」

「なっ!？」

たじろぐゆいちゃん。うーん、そんな風に聞こえたんだけど……。

「べ、別に私は別に君と頬ずりをしたい訳では……いや、したくないわけではないが今のこの流れでは……!？」
頬ずり……したいって事なんだよね？

「キミは私を羞恥と萌えて殺す気か!？」

「えー? 殺したりなんてしないよお。ただ、ゆいちゃんともっとお近づきになりたいなー、って」

「や、やめる……わ、私はマウンтоポジションを取られてのプレイは苦手なんだ!」

「ふえ……? ーついうの苦手なの……?」

「あ……それはだな、シチュエーション次第というか、立ち位置が大事という訳でな……」

「?」

その時。
キーンコーンコーンコーン……。

予鈴のチャイムが鳴りました。

「……と、とにかくくだ小毬君。私は当分キミたちのスキンシップは基本見る専でいさせてもらおう。……もし私が辛抱堪らなくなったら、その時に改めて襲わさせてもらおう」

「ふええ……」

「では、授業が始まる。さらばだ小毬君」

……ゆいちゃんからスキンシップしてくるって意味だよな?

後ろからガバーツて覆いかぶさってくるのはびっくりしちゃうけど、スキンシップはいつでも大歓迎だよー。

恭介さんからメールが届いたのは、お昼休みでした。

リトルバスターズのメンバー全員に宛てられたメール。

『今日はソフト部が新人戦に向けてガチな練習をするらしい。俺達グラウンド使えなくなっちゃったから、今日は各自自主練で頼む』

ふええ、そうなんだー。

あ、そういえばさーちゃんからこの間そんなお話聞いたっけ。

今年が部員のみんなの気力が充実してて、いい成績が残せるみたいなのだそうです。

そっかー……じゃあ、今日はさーちゃん部活動がんばってくるんだね。

帰ってきたら、ジャスミンティーを淹れて……ストレッチとか手伝ってあげよう。肩も揉んであげよう……ってそれもストレッチかなあ？

放課後。

今日はリトルバスターズの練習が無くなったので、校内を散歩することにしました。

いいお天気だしねー。

「やははー、それ回れ回れー」

「わー……ふー……」

廊下で盛大に回ってるクーちゃんと、そのクーちゃんを回しているはるちゃんを見かけたのは、そんな散歩の途中でした。

「ふわわ、はるちゃん！クーちゃん目が回ってるよお」
慌てて止める！

「いやー、今日はリトルバスターズの練習無くなって暇じゃん？そこでクド公見つけたら久々にやりたくなくなっちゃってー」

「わくわく、ぐるぐるなのです」

「もー、はるちゃん。クーちゃんをおもちやしちやいけません」

三枝葉留佳だから、はるちゃん。

能美クドリヤフカだから、クーちゃん。

「あー……、確かに回し過ぎちゃったかもしれませんが……。大丈夫？クド公？」

「ふへあ……」

「あら、まだ大丈夫じゃないか」

「もー、あんな事してたら、風紀委員さん来ちゃうかもしれないよ？お姉ちゃん困らせたらだめだよ？」
はるちゃんのお姉さんは風紀委員さんなのです。

はじめて聞いた時にはびっくりしたけれど、でも、よく考えてみたら結構似てるところもあるんだよね。「いやいやそれがですネ、お姉ちゃん、学校で私に怒った時はその日の夜すんごく優しくしてくれるんですヨ……。そりゃあもう私に抱きついて……ってひゃああっ!?」

私と話していたはるちゃんがいきなり後ろに引っ張られました。

「校内でのろけるの禁止!」

はるちゃんをずかずか引っ張ってくその人は……

「わふ、佳奈多さん!」

ようやく回復したクーちゃんの声。

そう、はるちゃんのお姉さん。かなちゃんです。

二木佳奈多だから、かなちゃん。

「……神北さん、葉留佳となんのお話をしていたの……?」

顔をほんのり染めながら、かなちゃんが訪ねてきました。

「うん、二人がとーってもなかよし姉妹さんだねーってお話をしてたんだよー」

「……………」

あ、今度は真っ赤になった。

「そ、そんなに変な話なんかしてないよおー! はーなーしーてー」

襟の所を掴まれながら、はるちゃん。

「……そ、そう。ならいいのだけれど」

変な話ってなんだろうねえ。

「あ、そうだったわ。大丈夫? クドリヤフカ。さっき葉留佳に思いっきり回されていたけれど」

かなちゃんがクーちゃんに声をかけました。

さっきから見てたのかな?

「わ、わふ、私なら大丈夫ですよ佳奈多さん! 葉留佳さんにはよく回されているのでもう慣れました!」

満面の笑みで言うクーちゃん。

慣れたんだ! ……。すごいねえ。私ならきつと何度やられても立っていられないと思う。

「慣れてどうするのよ慣れて……」
少し呆れた表情のかなちゃん。

「あーもう……。と、とにかく、うちの妹が失礼をしたわ。今日この子は私が手綱を握っておくから」

「手綱!? はるちゃんペット扱い!?」
ふええ、た、手綱かあ……。

はるちゃんおてんばさんだからねえ。

「ほら葉留佳、行くわよ」

はるちゃんの肩を持って、ずいずいと歩いて行くかなちゃん

「わわ、そんなに押さなくても歩けるよおねえちゃ〜ん! ……あ、じゃあねーこまりんにクド公、また遊ぼうねー」

「あ、はいー、しーゆーれいたー。ばいばいですー」

「ばいばーい、はるちゃん、かなちゃん」

クーちゃんと一緒に二人を見送りました。

……私かなちゃんの事呼んだ時一瞬がくってよろめいた気がするけどなんだったんだろう。何か足に引っ掛けちゃったのかな。

廊下でも足元には気をつけないといけないね。

私とクーちゃんの二人が廊下に残されました。

「……行ってしまいました」

「にぎやかだったねえ」

今聞こえてくるのは、少し開いている廊下の窓、その外から入ってくるものだけ。

風で木々が擦れる音、遠くからの部活動のかけ声。

なんだろう、こういうの。台風一過、かな?

「かなちゃん、お顔真つ赤だったねー」

前にセーターの事で注意されちゃった時もそうだったけど、かなちゃんはずっとクールでシュツとしたイメージがあったので、さっきのかなちゃんは結構新鮮で可愛かったなあー。

「佳奈多さん、結構照れ屋さんですからね。多分葉留佳さんがのろけていたあの雰囲気当てられたのかと」「ふええ？ そうなの？」

姉妹さんだから、そんなの気にしなくてもいい気がするんだけどなあ。

「ところで、クーちゃん。今日はお暇？」

「わふ、そうですね、今日は練習お休みなので、夕方に風紀委員のお仕事が終わったストレルカとヴェルカとお散歩をする予定だったので……今はお暇です！」

につこりと、クーちゃん。

尻尾があれば思いっきり振ってるかもしれない。

「じゃあ、それまで私とお散歩しようよ」

「わふ、いいですよー！」

クーちゃんも喜ぶように、お日様がいっぱい当たる所を歩いて回ろう。

「神北さんと、能美さん……こんにちは」

お日様が当たる場所を探して、私とクーちゃんは中庭へ。

中庭にある一番大きな木。

その下で、みおちゃんが本を読んでいます。

西園美魚だから、みおちゃん。

「こんにちはー」

「こんにちはですー」

こくり、と会釈でお返事するみおちゃん。

「お隣、座っていいかなあ？」

「……どうぞ」

本に目を落としながらみおちゃんが答える。

「おじゃましますーす」

私とクーちゃんの声が重なる。

「……くすっ」

本を読む手は止めず、みおちゃんが口元を歪ませた。

木陰で三人だけの時間が過ぎていく。

私達を無でていくそよ風の感触とたなびく葉音。そして目を開けているのが大変なくらいの木漏れ日がとても気持ちいい。

今日はなんだか特別あったかいなあ…。

こういうのって、小春日和っていうんだっけ。

「……………」

気づけばみおちゃんも、本から顔を上げていた。

「ぼかぼかきもちいーねえ……」

「……そうですね」

しおりを挟みながら、みおちゃんと言う。

本を膝に置くと、瞳を閉じて、風を感じているようだった。

ふえ……。

「ふわ……あ……」

「わふう……これだけいいお天気だと……なんだか眠たくなってきてしまいますね……」

私があくびをしたのと同じタイミングで、クーちゃん。

「ダメだよおクーちゃん。ぼかぼかできもちいーけど、眠っちゃったらみおちゃんに悪いよう……」

そうだよ……ご本読んでるじゃましちやいけないうお……。

「わふー……そうですねー……」

「少しならお眠りになっても、大丈夫ですよ。日が沈む時間になったら起こしますの……」

「いえいえー……夕方には……ストレ……ルカと……ヴェル……おさん……ぼ……」

「……クーちゃん？」

「……すー」

「おやすみなさい、能美さん」

ふええ……クーちゃん寝ちゃったよお……。

「神北さんも、ご無理なさらず……」

「……ふええ？」

……みおちゃん……？わたしのお口なんか拭いてどうしたの……？

「よだれが垂れていました……。ふふっ、もう完全におやすみモードですね」

「だーいじょーぶ……だよー……」

「……そうですね。おやすみなさい、神北さん」

「……ふにゃ……おやすみなさい……」

……。

……。

……。

「……？」

私が目を覚ました時には、空はもう真っ赤でした。

「……ふええ！？」

飛び起きる。

「おはようございます。神北さん。……もう夕方ですが」

私の驚きの声で、中庭の前を通っていた子達がビクッとしていたけれど、隣にいたみおちゃんは全然驚いていない様子はありませんでした。

「わ……わたし、寝ちゃってたの……？」

「はい。能美さんがお眠りになった後、間髪入れずすぐに」

「ふわあ……」

……クーちゃんが寝たところはなんとなく覚えてはいるけれど、あの後すぐに寝ちゃったんだあ……。

「……あれ？ クーちゃんは？」

その時、一緒に寝ていたクーちゃんの様子が無い事に気付く。

「能美さんなら、ストレルカとヴェルカの散歩に行かれましたよ。主人想いな子達ですね、向こうから迎えに来ましたよ。その時に能美さんだけ起こしました。神北さんはまだ気持ちの良さそうな寝顔でお眠りでしたから」

「あ……そ、そうなんだー……」

つまり私は、みおちゃんやクーちゃん、ストレルカとヴェルカに見守られながらずっと眠りこけていたという事らしい。

(ふ、ふええ、すっごい恥ずかしい〜！)

顔から火が出そうでした。

びたっ

「……ひゃ!？」

火が出そうだったおでこに、みおちゃんの手が当てられる。

その手がひんやりしていたので、思わず声をあげてしまいました。

これはこれで別の意味で顔から火が出そうだよお……。

「熱はないようですね。昼間に比べてかなり冷えてきていたので、もしや風邪でも引かれてしまったのかと」

「え……うん、私はいじょうぶだよー」

咳とかもないし。だいじょうぶだよ、みおちゃん。

「心配してくれてありがとうー」

「そうですか……。安心しました」

ホッとした表情のみおちゃん。

純粹に心配してくれたのに、なんだか勝手にびっくりしちゃったよ……。

「……では、そろそろ戻りましょうか。いい時間です」

「あ……そうだねー」

時刻は五時。

空を見ると、もう夕闇が迫ってきていました。

もう日が短くなってきたいるもんね。あつという間に夜になっちゃう。

私も部屋に戻って、さーちゃんを労ってあげる準備をしないと。

さーちゃん、まだ練習しているんだよね……。

「(ようしっ!)」

別にへこんじゃっていないけど、前向きマジックで気持ちを奮い立たせます。

帰ったらまずは……さーちゃんの大好きなジャスミンティーの準備っ!

「じゃあねみおちゃん、また明日ー!」

奮い立ったテンションのままみおちゃんに挨拶し、なんでそんなにハッスルしてるんだろう? と? マークを浮かべてるみおちゃんを背にして、私は部屋へと駆けて行きました。

くおまけ

今日は非番なので存分に羽を伸ばさせて頂きますと言っていたかなちゃんが妹さんをひっさげて寮長室にやってきたのは、丁度能美さんのとびきりのお茶をこっそり淹れていた時だった。

「あらあら、かなちゃんが羽を伸ばしたかったのはここなのかしら」と聞いたらバツサリと斬られてしまった。

なんでも、いつも遊んでいる養君のあの集団が今日は解散状態で、校内で荒ぶっていた妹さんを匿う為にやってきたらしい。

……言い様がえらい事になっているのは、ズバリかなちゃんの方がテンパっていたから。

あの時のかなちゃん、目の中グルグル渦巻きになってたわ……。

とりあえず、今日は妹さん専用の風紀委員さんになっていたかなちゃんをなだめる為、お茶を淹れる。さっきの能美さんのお茶。

淹れてる時にこの姉妹に鉢合わせになってしまったので、もう全然こっそりじゃない。

今はただ平静を装って、このお茶を彼女らにも振る舞う。それだけである。

この時が一番の修羅場だったわ……。

「このお茶を飲む時は、私も同席します。抜け駆けしないで下さい」というかなちゃんとの口約束を破ってしまったのだから。本人の目の前でね……。

というわけで、お茶を注いでいる間のかなちゃんの疑いの眼差しに、私の良心は冷や汗タラタラであったのでした……。

でもま、このお茶の美味しさは本物ね。飲んでたらかなちゃんのご機嫌がかなり回復したんだもの。えーと、七五パーセントくらいまで？

基本的になかちゃんのご機嫌が取れるのは妹さんだけなので、ここまで健闘するこのお茶は凄いのだ。凄いから、今度能美さんにまた持ってきて貰えるようにお願いしてみよう。

で、場が和んだので、以下リアルタイム。

「おねえちゃん、こまりんからかなちゃんって呼ばれたら、その場で綺麗にズッコけたんですヨ」
妹さん——はるちゃんが嬉々として語る。

「だ、だって、あんな大きな声で呼ばれたら……」

「あの時のお姉ちゃんの顔は茹でダコのようにでしたネ！」

「はりやー、かなちゃんのはずかし方面の赤面顔って久しく見てないわ。また見たいな……。ねーかなちゃん」
「かなちゃんって呼ばないで下さいあーちゃん先輩」

ありやりや、あっさり。顔色ひとつ変えやしない。

「おねえちゃんを攻略するには、新たな刺激ですヨ。ここらで一つ、キラーな感じの新あだ名を発案すべきですネ」
「おおなるほど。では、かなちゃんマイスターであるはるちゃん、それはズバリ……？」

かなちゃんマイスターに答えを促す。

「それはズバリ……私のもう一つのあだ名が『はるちん』だから……」

「……はい！かなちゃんマイスター先生、私も閃きました！」

「答えは一つしかありませんネ。では、一緒にいきますよー！　せーの……」

「かなたん」

……この時かなちゃんがお茶を嘔きこぼす寸前で踏みとどまれたのは、この子の女子力の賜物であると思う。
はあ……かなちゃん、かわいいわあ……。

あとがき

ここまでお読み下さりありがとうございます。サークル『T T M』の担担麵です。
このPDFは鍵点時に配布した『小毬 Going my way』の修正版となります。

初版は鍵点当日の朝に完成させたこともあり、校正が甘かったりあとがきを入れる事も出来なかった等、お見苦しい点が多々ありました為、今回それらの修正を加えたものをウェブ上にて公開させて頂きました。

まだまだ拙筆ではありますが、これを機に多くの方に読んで頂ければと思います。当サークル『T T M』のウェブサイトを共々、よろしくお願い致します。

今回の本はこまさ話から派生して、小毬ののほほんとした(?)一日を書いてみました。

■第一章 明方・佐々美受難編

小毬の寢言ネタを書きたくて作った一編。

小毬は知らず知らずのうちに鈴と佐々美様を同一視していたりしてたら激しく萌えます。『二人ともねこさんみたいでかわいいな』とか。

佐々美様は朝からえらい目に遭ってしまった訳なのですが、あの髪のお手入れは本当に大変そうです。

■第二章 日中・小春日和と渾名呼び編

補足しますと、今回のお話の時間は、リフレインく佐々美ルートの間、九月末く十月頭の頃で設定しています。

その時期の、丁度暖かい日の昼下がりで、そんな感じです。みんな元通りになった日常。

この章のミソは、小毬の渾名呼びと、タジタジになる佐々美・来ヶ谷・佳奈多のリトバスツンツン勢でしょうか。鈴がほんの一瞬しか出せなかったのが申し訳なく……あと今回男子勢が全然出てこなかったのが、今度は彼らも書いてみたいです。理樹のツツコミとか書くの楽しそう……。

最後のあーちゃん先輩は、佳奈多をかなたん呼びさせるならこの人(と葉留佳)だろうなーという事で登場して貰いました。彼女の小気味の良い性格は、書いていて凄く楽しいです。

それでは、今回はこの辺で。前回より本文のボリュームがある為にあとがき一ページしか取れない！

今回の内容も、いつか正式版のリトバスの短編集を発行して、そこに織り込みたいなと思っています。
それではご縁がありましたら、また次回、お会い致しますよう！

二〇一三年五月二八日

担担麵

TTMのNYコピー本第一弾。

『小毬ちゃん、わが道を行く。』

リトルバスターズ！EX 同人小説
『小毬 Going my way』
(Web 公開版)

2013年5月28日発行

発行人：担担麵

発行：TTM

Web: <http://emotionaltrain.web.fc2.com/index.html>

Twitter: <https://twitter.com/tan2men>

TTM Little Busters! EX Fanbook-EX
“Nandaka Yokuwakaranai coPy-book 1(Web Ver.)”